

Ⅶ 研修の視点と具体的な手立て

1 視点1 発問・指示の吟味

設定理由

教員が、子供から自分の思いや考えを上手に引き出すことができない。問い掛けても子供の表情は「ふにおちない」ように感じられ、授業展開に悩むことが多かった。

よって、子供たちが「考えることが楽しい、自分の意見をたくさん述べたい」と感じられるようにしたいという思いから以下の「イ～ハ」までを具体的な手立てと考える。

さらに、子供の実態や反応を踏まえた上で、学習課題や学習場面に適切と考えた「イ～ハ」を必要に応じて取り入れることとする。

イ 取り上げる語や文の明確化

明確化の意義について

授業の展開の中で、「どの語と、どの文」を手掛かりにすると、子供がより楽しく自信をもって考え、発表し合えるか、さらに、有意義な交流を図るために「教員は意図的に語や文を取り上げること」が有効であると考ええる。

ロ 意図的な音読の位置付け

音読の使い分けについて

音読の位置付けは、後述する「第一次研修のまとめと平成25年度の取組について」で述べる。ここでは、いろいろな音読指導の形態について述べる。

- | | | |
|-----------|--------|---------|
| ① 一斉読み | ② 円陣読み | ③ 共読み |
| ④ 追いかけて読み | ⑤ 一文読み | ⑥ 段落読み |
| ⑦ 分担読み | ⑧ 役割読み | ⑨ 拡大語読み |
| ⑩ 速読み | ⑪ 唇読み | ⑫ 微音読み |
| ⑬ 指差し読み | | |

取り扱う場面と子供の実態に応じて、使い方を熟慮しなければならないと考える。

ハ 板書計画表・発問・指導計画表の作成

板書計画表と指導計画表作成の意義について

学習活動と指導を構造的・意図的に組み立てるために、指導過程に「どの場面で何を板書するのか」を明記することは、大切であると考ええる。

さらに、子供に「今、何を学習しているのか、しようとしているのか、してきたのか」を指導計画表として教室内に掲示することによって、子供自身が学習を常に確認し合い安心して授業に参加でき有意義であると考ええる。

発問の性質を意識して

- | | |
|--------------|------------------|
| ◎, ○ 「広げる発問」 | ☞ 「拡張・拡散的思考を促す」 |
| ◎, ○ 「深める発問」 | ☞ 「深層的・熟慮的思考を促す」 |
| ×, △ 「閉じる発問」 | ☞ 「収束的・閉鎖的思考を促す」 |

を使い分けることが、子供の思いや考えを広げたり・深めたり、もたせたりする手立てになるものと考えます。

2 視点2 思いや考えを交流する場の工夫

設定理由

友達の思いや考えに対応した、子供同士の意見交換がなかなか上手にできない。お互いの思いや考えを伝え合ったり、話し合ったり、練り合ったり等をどのようにしたら子供たちに身に付けさせられるかという思いから以下の「イ～ニ」までを具体的な手立てと考える。

さらに、子供一人一人に発表する機会を平等に保障するために、「イ～ニ」を必要に応じて取り入れることとする。

イ 学習形態の工夫（ペア・少人数・全体）

本校の一学級当たりの児童数（一学級十数名～二十名前後）を念頭に置いて、教員が子供一人一人にしっかり向き合い、個々の児童理解に努め、子供のよさを引き出すためには学習形態を見直すことが大切と考える。（基本的座席配置）その上で、交流を意識しての座席編成をも考える。

ロ 話し合いの目的・着眼点の明確化

子供たちに交流の場が、どんな意味をもっているのか、何のために話し合い、相談し合い、協議し合うのかをはっきり伝えることが大切であると考えます。

- ・ 自分の考えを伝える。さらに、しっかりまとめる。
- ・ 相手に対して自分の考えや思いを自分の言葉で伝える。
- ・ 相手の考えや思いを聞いて、自分の思いや考えを見詰め直す。
- ・ 時には、「ペアやグループ」で一つの考えにまとめたりする。

・ 全体場で、ペアやグループでの思いや考えをまとめて発表 したり個々の思いや考えを発表したりする。

ハ 効果的な指導過程への位置付け

一時間の学習の中で、指導過程の「どの場面で、どの学習形態（座席編成）」が子供の思いや考えを引き出したり、まとめたりするのに適切かを熟慮することが大切であると考えます。

二 思いや考えの変容・広がり・深まりを表現させる工夫（音読・発表・動作化・感想・意見）

言語環境整備の一環として、各教室に掲示してある「話し方、聞き方」を基にして、自分の言葉で表現できるようにすることが大切であると考え。そして、基本となる「話し方、聞き方」がしっかり身に付いて「変容、広がり、深まり」へと拡張されると考える。

また、授業の展開では「ワークシートやルートガイド」等を使用して、それぞれの思いや考えをまとめたりする一助とすることも大切である。

3 視点3 志教育の三つの視点の意識化

設定理由1

主題設定理由の補充詳細記述で述べたことをより具体的に熟慮して、国語科の学習で教員が志教育の三つの視点を意識して授業展開できれば、子供の思考に「より具体的なものの考え方や見方」を養うことができ、少しでも自分の思いや考えを進んで表現できるのではないかと考える。

そして、国語科の全ての単元で志教育の視点を意識することは困難であるので、志教育の視点を意識できる単元を熟慮して選定することが大切である。

また、選定した単元の指導計画を踏まえてどの場面（総指導時数の何時間目）が志教育の視点を意識できるかがとても大切で熟慮しなければならない。

さらに、研修主題「自分の思いや考えを進んで表現する児童の育成」に迫るためには、「国語科としての目標・単元としての目標・単元を貫く言語活動」を意識して、国語科としての学習の成立が大前提である。

設定理由2

国語科の授業が道徳の授業にならないように注意しなければならない。

志教育の視点を意識するあまり、道徳の基本スタイルである「価値の補充一深化一統合」や「価値の一般化」を求めるのではないことに心掛けている。

道徳では、一般的に終末に「教員の逸話や説話、児童の感想発表や感想文作成等」を設定し、学習の締めとすることが多いのではないだろうか。

本校では、授業の内容から離れることなく、常に教材を意識した上で、教員が授業の最後に志教育を意識した思いを時には熱く語り掛けて締めてはどうかと考える。

イ 人とかかわる ロ よりよい生き方をもとめる ハ 社会での役割をはたす

本校教員の志教育の意識化の方向性について

みやぎの志教育の視点は三つ述べられており、小学校段階での取組も例が記載されていることは、前述したとおりである。

例示は、日々の教育活動全般で取り組み、志教育の方向性を受けたその精神を国語科の特定の単元で可能な指導場面で意識化できればと考える。

具体的には、下記のことを意識して、それに相応しい単元・教材及び指導場面の選定を行い、授業を試みている。

「イ 人とかかわる」の精神は

「**自己理解や他者理解の深化、人間関係の構築力・社会性の育成**」

「ロ よりよい生き方をもとめる」の精神は

「**学ぶ意義の実感、自らの在り方・生き方の主体的探究**」

「ハ 社会での役割をはたす」の精神は

「**自分のはたすべき役割の認識、自己有用感の高揚**」

以上のことを教員が意識して授業を進めれば、志教育の求める方向と両立できないか考える。

前にも述べたが、国語科の目標、単元の目標、言語活動を踏まえた上での試みであり、詳細は、成果と課題の「志教育と日々の学習活動とのイメージ図」で記述する。

4 視点4 ミニ授業研修体制の推進

設定理由

後述する「第一次研修のまとめと平成25年度の実践について」で詳細に記述されているが、基本とする考え方を述べる。

選定した同じ単元でミニ授業研修を2回以上実践し、その同じ単元で全校授業研修を実践することにより、研修視点に沿った継続した研修に取り組むことができる。それは、次につながられる深い教材研究を行うことになり研修としての蓄積・教員としてのより一層のスキルアップになると考える。

さらに、事前検討会・事後検討会を行いそれで終わりではなく、それぞれの検討会を価値ある有意義な検討会にするために、それぞれで研修した内容を「後起案指導案」というスタイルで修正部分のみを「**朱書き修正・改訂指導案**」に書き直す。これを行うことによって、改めて自分の授業を見つめることになり、よりよい次時の授業を探究できるものと考えている。

その途中で、指導案の見直しも何度も行われている。特に、評価規準と指導過程にその軌跡を見取ることができる。

イ ミニ授業研修の実施 ロ 全校授業研修の実施 ハ 後起案指導案の作成

Ⅷ 研修の進め方

1 研修の方法と内容

1) 平成23、24年度の校内研究の成果と課題、

平成23、24年度全国学力・学習状況調査の分析、

H25 自主公開経過報告会のまとめ

平成23、24(25)年度TK式DR T学力検査の分析を受けた主題・副題の設定

2) 実践研修会を中心とした手立ての検証及び指導の改善を図る研修の推進

(積極的な授業公開による指導力の向上と授業改善)

・学年部を主体としたミニ授業研修，全校授業研修の計画と実施，

後起案指導案の作成の実施

〈授業研修会の持ち方〉

- ・ 実践研修会は学年部を主体に行う。
- ・ ミニ授業研修会は一人2回以上行う。

*ミニ授業研修会とは？

学年部研修とする。

指導案は学年部で作成し，略案とする。

学年部を中心に参観し合う。

模擬授業等をも推進する。

ミニ授業研修会の成果を生かせるならば，同一単元でなくともよい。

- ・ 全校授業研修会は一人1回行う。（指導案は細案，全校で参観し合う。）
- ・ ミニ授業研修会，全校授業研修会の前後には，検討会を行い，事前事後検討会の記録と後指導案を作成する。
(事後検討会の記録は授業者以外が作成し，後起案指導案は授業者が作成する。)

3) 日常活動の工夫

言語に関する能力を向上させ，言語に対する意識や関心を高め理解を深めることは，国語をはじめとする教科等の学習活動のみではなく，学校でのすべての教育活動で私たち教員が意識的に配慮しなければならない。

日々の学校生活・家庭生活等の全ての日常生活において，言語活動はある目的をもって行われているはずである。その目的を達成するためには，それに相応しい言語活動をしなければならない。そのためには，思考力・判断力・表現力等を基盤とする「自分の思いや考えを表現する」知識・理解・技能を児童に身に付けさせなければならない。

よって，児童の言語活動に大きな影響を及ぼす児童のための言語環境を私たち教員が整備し，日々の日常生活で指導を意識しなければならないと考える。

主な取組例は，以下のとおりである。

- ・ ドリルタイム，読書タイム，辞典や事典の活用，家庭学習の習慣化（家庭学習の手引配布）
- ・ 朝の会や帰りの会でのスピーチ等の指導
- ・ 最小限必要な掲示物の作成と共通掲示
- ・ 朝会での児童代表の挨拶時における時節を意識した一言スピーチ指導
- ・ 学級活動や児童会活動等の特別活動での教員の意識的な問い掛けや励まし等の関わりの習慣化

- ・ 日々の挨拶や返事の指導
- ・ 職員室への入出指導
- ・ 休み時間や放課後等の児童相互の言動への留意

4) 学習環境の整備

- ・ 基本話形(5W1H, 7W1H1S等)や話の聞き方・既習事項・学習計画・資料など掲示物の工夫

イ 5W1H

「When, Where, What, Who, Why」

ロ 7W1H1S

「When, Where, What, Who, Why,

Whom, Which, How, Show」

2 国語科の言語活動と主な確認事項

1) ねらい

知的活動（論理や思考）だけでなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤となる言語能力を育成するために、各教科等のねらいや特性に即して、思考力、判断力、表現力等を育てるための基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視する。

さらに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動の充実を図る。

2) 言語活動と交流の場の充実

イ 言語活動とは

国語は、「言語の教育としての立場を一層重視し、国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるとともに、**実生活で生きてはたらき（働き）、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること等**」に重点を置いて国語科の内容の改善を図られていることは周知のことである。

（我が国の言語文化の享受、継承・発展させる態度も）

さらに、言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成する等が重視されることも周知のことである。（我が国の言語文化に触れての感性や情緒の育みも）

国語の各領域構成を維持しつつ、「基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることに資するよう、**実生活の様々な場面**におけ

る言語活動を具体的に内容に示す。」と国語の学習指導要領の解説に記述されている。

すなわち、言語活動とは、国語の三領域「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の言葉を使うすべての活動であり、実生活で生きてはたらく（働く）ものでなければならぬと捉える。

ロ 単元を貫く言語活動とは

単元を通じた学習課題を解決していく過程の方向性として、その単元を通して一貫して位置付けられる言語活動と捉える。しかし、それは目的ではなく本校の表現力を高めるために読みの力を身に付けさせるための一方策（手段）と捉える。

各学年における「C読むこと」の言語活動例（学習指導要領から）

第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
ア 本や文章を楽しんだり、想像を広げたりしながら読むこと。	ア 物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。	ア 伝記を読み、自分の生き方について考えること。
イ 物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりすることができること。	イ 記録や報告の文章、図鑑や事典などを読んで利用すること。	イ 自分の課題を解決するために、意見を述べた文章や解説の文章などを利用すること。
ウ 物事の仕組みなどについて説明した本や文章を読むこと。	ウ 記録や報告の文章を読んでまとめたものを読み合うこと。	ウ 編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと。
エ 物語や、科学的なことについて書いた本や文章を読んで、感想を書くこと。	エ 紹介したい本を取り上げて説明すること。	エ 本を読んで推薦の文章を書くこと。
オ 読んだ本について、好きなどころを紹介すること。	オ 必要な情報を得るために、読んだ内容に関連した他の本や文章などを読むこと。	青書きでの言語活動例は、本公開研修会での「単元を貫く言語活動」を示す。

ハ 交流の場とは

「自分の思いや考えを進んで表現する」ためには、主題設定の理由でも記述したとおり児童個々の思考力、判断力、表現力等の能力を高まるように育まなければならない。

その能力を高め育むためには、言語活動の充実が大切となる。

以下に、文部科学省の中央教育審議会からの答申例を記載する。

- * 体験から感じ取ったことを表現する。
- * 事実を正確に理解し伝達する。
- * 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- * 情報を分析・評価し、論述する。
- * 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
- * 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。
- * 児童一人一人にじっくり自分の思いや考えをまとめる時間を与えること。
- * 目的に応じた話し合いや協議の方法を児童の発達段階に応じて、しっかり身に付けさせること。

上記の例を踏まえて、日々の学習活動における言語活動の充実がより一層大切となる。さらに、**実生活で必要とされる**記録、報告、紹介、感想、討論、情報等の言語活動を行う能力を身に付けられるように継続的に指導し、課題に応じた必要な文章や資料等を使用して、基礎的・基本的な知識・技能を活用しながら**児童相互の思いや考えを深めること**が大切であると考ええる。

特に、「読むこと」については、児童にとって「読む目的」を明確にすることが大切である。選定した本や文章、資料の活用目的、その内容を明確にして児童個々の考えを広げたり、深めたり、まとめたりする交流が必要になってくると考える。

その必要な交流の場の設定は、以下の点に留意しなければならない。

- * 交流する視点を明確にして、すべての児童が参加できる場であること。
- * 単元を貫く言語活動を意識した交流の場であること。
- * 学習の成果等を実感できる場であること。
- * 実生活で生きてはたらく（働く）言語活動が身に付く場であること。

3) 国語科の言語活動における指導の例

国語	中核的な教科として、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のそれぞれに記録、要約、説明、論述といった言語活動を例示
----	---

4) 観点別学習状況評価及び言語活動と評価規準の見直し

学習指導要領の評価の観点は、以下のとおりである。

- * 関心・意欲・態度
- * 思考・判断・表現（言語活動を中心とする表現に係る活動と一体的に評価する観点）
- * 技能
- * 知識・理解

さらに、学力の3要素は、以下のとおりである。

- * 基礎的・基本的な知識・技能
- * 課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- * 主体的に学習に取り組む態度

上記の評価の観点と学力の3要素との位置付けからの評価は、

- * 主体的に学習に取り組む態度は、
☞ **関心・意欲・態度** として評価する。
- * 課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等は、
☞ **思考・判断・表現** として評価する。
- * 基礎的・基本的な知識・技能は、
☞ **技能及び知識・理解** として評価する。

具体的に、単元の評価規準を設定するためには、

- * 学習する単元で取り上げる指導事項と言語活動を確認すること。
- * 単元の目標を設定すること。
- * 指導計画及び指導過程をイメージすること。

よって、評価規準の項目は次のように見直しを行う。

- * **「関心・意欲・態度」**
(与えられた場面を主体的に場面の様子や登場人物の行動を読む能力を育む。)
- * **「話す・聞く能力」, 「書く能力」, 「読む能力」**
(すべてを学習する単元で取り上げる必要はない。)
- * **言語についての「知識・理解」, 「技能」**
(伝統的な言語文化に関する事項は、言語についての項目で評価する。)

ミニ授業研修体制を推進しながら、研修を蓄積する中で学習指導案の単元の評価規準の見直しも随時行われたが、好ましいものではなく、本年度6月の学校訪問D訪問及び自主公開経過報告会を受けて、再度研修した。

すなわち、単元の目標を意識してその目標に相応した評価規準の観点の項目とその内容を見直した。

5) 学習指導案における指導計画の見直し

単元を貫く言語活動を位置付けた単元構想をしっかりとイメージすることが、大切である。

例えば、単元の全体時数を大きく「第一次を導入部分、第二次を展開部分、第三次をまとめ部分」と押さえるとする。(単元の内容によっては、第一次から第三次構成とは限りない。)

第一次は「言語活動全体の見通しをもたせる段階と押さえる。」



「見通しをもたせる段階」

* 児童が学習の見通しを立てたり，学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れる工夫をすることが大切である。

すなわち，児童に学びの方向性を示し，それを児童一人一人が実感できるような工夫を図ることが求められる。

第二次は「教科書教材等を目的をもって読ませる段階と押さえる。」



「具体的な能力の指導の段階」

* 第三次との関連性をしっかり押さえて，児童一人一人がその関連性を意識できるように工夫・構成し指導することが大切である。

* 私たち教員が最も留意しなければならない事は『前述した各学年における「C読むこと」の言語活動例』をしっかりと意識することである。

第三次は「自分の表現に適用する段階と押さえる。」



「力の獲得を見取る段階」

* 第一次・第二次と見通しをもって具体的に学習を進め，言語活動を行うために身に付けてきた能力を発達段階に応じて表現することが大切である。

* そのためには，いろいろな交流の場を通して，児童一人一人が自分の思いや考えをしっかりとめ，いろいろなスタイルで表現することが求められるのであり，私たち教員はその見極めをしっかりと行うことが求められる。

よって，本校では，指導計画を大きく次のように押さえることにした。

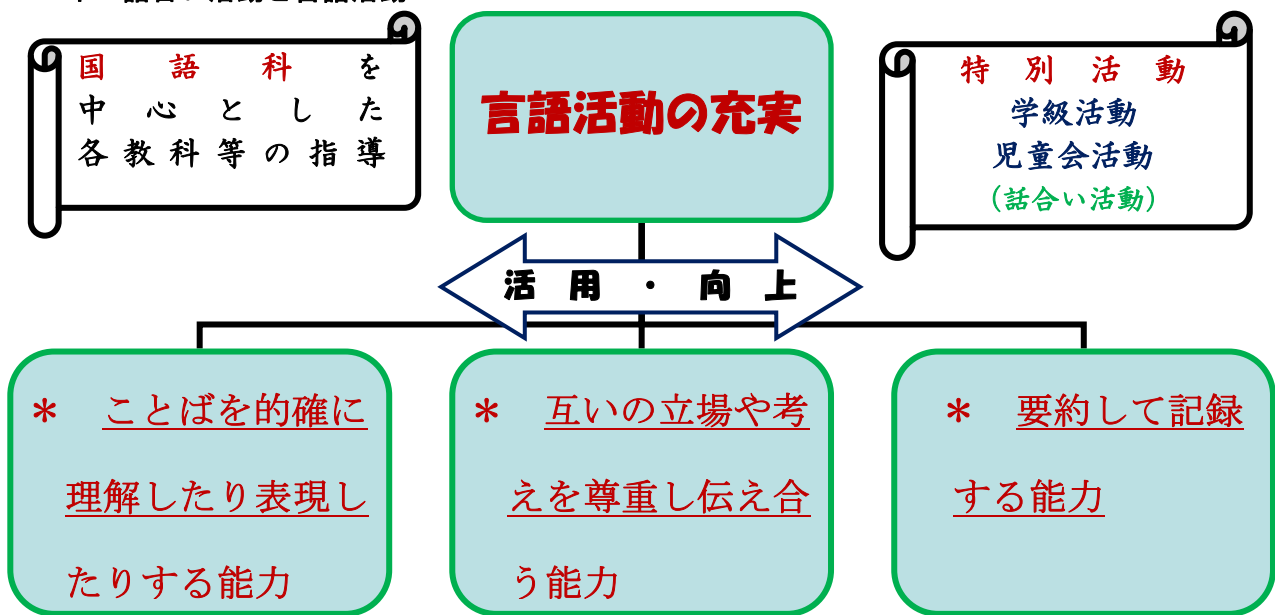
「7 指導計画（○時間扱い 本時 ○/○）」

区分	◎ ねらい ○ 学習活動	評価の観点			時間
		関心・意欲・態度	読む	言語	
第一次 (見通しをもたせる)	課題意識を膨らませ，学習の見通しをもたせる				
	<p>単元を貫く言語活動全体を見通せますか？</p>				
			この観点は，目標に合わせて設定するので，2列に増えることもある。		

第二次 ○ (具体的な能力の指導)	<p>言語活動遂行のための具体的な能力の指導</p> <p>単元を貫く言語活動と密接に結びついていますか？</p>			
第三次 ○ (力の獲得を見取る)	<p>身に付けさせたい力が獲得されたかどうかを見取る</p> <p>子供が言語活動を自力で遂行できるようになっていますか？</p>			

6) 特別活動における言語活動の充実

イ 話し合い活動と言語活動



ロ 発達段階に応じた学級活動・児童会活動「話し合い活動」の指導のめやす

低学年	中学年	高学年
<p>○ 教師が進行等の役割を受けもつことから始め、少しずつ児童がその役割を担うことができるようにしていく。</p>	<p>○ 教師の適切な指導の下に児童が活動計画を作成し、進行役の役割を輪番で受けもち、より多くの児童が司会等の役割を果たすことができるようにする。</p>	<p>○ 教師の助言を受けながら、児童自身が活動計画を作成し、進行等の役割を輪番で受けもち、話し合いの方法などを工夫して運営することができるようにする。</p>

○ 友達の意見をよく聞いたり、自分の意見を言えたり学級生活を楽しくするための集団形成ができるようにしていく。	○ 異なる考えなどについてもしっかりと聞いたり、理由を明確にして意見を言えたり、楽しい学級生活をつくるために、互いに話し合い集団形成ができるようにする。	○ 学級のみならず学校生活に目を向け、自分の言葉で建設的な意見を述べ合い、多様な意見のよさを生かして、楽しい学級や学校の生活をつくるためのよりよい集団形成ができるようにする。
--	--	---

7) 言語感覚と言語環境の整備

言語感覚とは、言葉の使い方の正誤・適否・美醜などについての感覚のことであり、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の具体的な言語活動の中で、相手、目的や意図、多様な場面や状況などに応じて、どのような言葉を選んで表現するのが相応しいかを直感的に判断したり、話や文章を理解する場合に、そこで使われている言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉えたりすることであると述べられている。

そのためには、児童を取り巻く言語環境はとても重要な意味をもつことになると思う。

児童の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等高め育む観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動をサポートし充実しなければならない。（指導計画作成等で配慮すべき事項参照）

イ 言語環境整備の教員の心得

- ① 教師は正しい言語で話し、黒板などに正確で丁寧な文字を書くこと。
- ② 校内の掲示板やポスター、児童に配布する印刷物において用語や文字を適正に使用すること。
- ③ 校内放送において、適切な言葉を使って簡潔に分かりやすく話すこと。
- ④ 適切な話し言葉や文字が用いられている教材を使用すること。
- ⑤ 教師と児童、児童相互の話し言葉が適切に行われるような状況をつくること。
- ⑥ 朝会や集会等での代表児童の挨拶や発表時には、話し方や内容を事前に指導すること。
- ⑦ 児童が集団の中で安心して話ができるように教師と児童、児童相互の好ましい人間関係を築くこと。

ロ 言語環境整備の具体的話形（話し方、聞き方）

【話し方】

低 学 年	○ 自分の思いや考えをはっきり話す。	
		・はい、～です。 ・はい、～とおもいます。 ・わけは、～だからです。（～とかいてあるので、～だとおもいます。）
中 学	○ 自分の思いや考えに理由を付けてはっきり話す。	
	考え・理由	・はい、～だと思えます。 ・わけは、～だからです。
	賛成・反対	・〇〇さんと同じです。 ・わけは、～だからです。

年	賛成・反対	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇とちがって、～です。 ・わけは、～だからです。
	付け足し 質 問	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇さんの考えに付け足して言うと、～です。 ・～について、もう少し詳しく教えてください。 ・〇〇さんに質問します。～は、なぜですか？
高 学 年	○ 自分の思いや考えに理由を付けて分かりやすく話す。 (例示, 仮定, 比較などを用いながら)	
	考え・理由	<ul style="list-style-type: none"> ・～です。わけは、～です。
	賛成・反対	<ul style="list-style-type: none"> ・～に、賛成（反対）です。わけは、～です。
	例 示 仮 定 比 較	<ul style="list-style-type: none"> ・例えば、～ ・もし（も）、～ ・～と（に）比べると
	質 問	<ul style="list-style-type: none"> ・～に、質問します。

【聞き方】

- 発表する人の方を向いて聞く。
- 発表が終わるまで、だまってしっかり聞く。